

資料

父親の育児と幼児の社会生活能力

——共働き家庭と専業主婦家庭の比較——

尾形和男¹THE FATHERS' CARE OF PRE-SCHOOL CHILDREN
AND THEIR SOCIAL ADAPTABILITY

——A comparison of single income families and double income families——

Kazuo OGATA

This paper elucidates the difference between the fathers' care of children in single income families and double income families, and the relationships between the fathers' care of children and their social adaptability. Subjects consist of members of single income families and double income families. Both families are unclear ones. Children are of the pre-school age. Major results are as follows: 1) The fathers of double income families tend to participate more in the care of their sons than the fathers of single income families. The fathers of single income families tend to participate more in the care of their daughters than the fathers of double income families; 2) Home discipline by the fathers is related to their sons' social adaptability from 1 to 3 years of age in double income families, and it is related to social adaptability of the sons and daughters aged 1 to 3 in single income families; 3) The home environment that is the result of the mutual understanding of the father and mother on the policy toward their children's care is related to the social adaptability of their daughters in the 4 to 6 year-old bracket.

Key words: father's care of pre-school children, single income families, double income families, pre-school children's social adaptability.

問題と目的

子どもの社会性の発達に及ぼす父親の影響に関する研究は、父親不在家庭を対象としたものと父親健在家庭を対象としたものの2つに分けられる。前者の場合は、出兵、離婚、別居、単身赴任等による父親不在家庭における子どもの問題行動をとりあげたものである。これに関する研究では、父親不在が子どもの発達に好ましくない影響をもたらすという報告が多い。例えば、

父親不在が子どもの道徳性に悪影響を与えるとする研究 (Oltman & Friedman, 1967) や、父親不在の家庭では非行の発生率が高いとする研究 (Anderson, 1968)、また、13歳から17歳の第1子で、男の兄弟のない白人の女子青年に関し、特に離婚家庭の場合に異性との適切な交流が出来なかったとする報告 (Hetherington, 1972)、さらに、母子家庭の子どもに特に問題行動が多くみられるという指摘 (萩原, 1987) などがある。

父親健在家庭における父親の影響をとりあげた研究では、父親の直接的な影響と間接的な影響について分析検討がなされている。直接的な影響に関する研究としては、乳児期に父親との間に形成されるアタッチメ

¹ 国際学院埼玉短期大学 (Kokusaigakuin Saitama Junior College)

ントに注目したものがまず上げられる。例えば、Lamb (1976) は乳児の家庭での自然観察を行った。その結果、12か月の時点では一方の親のみに対する選択はみられず、父親に対しても母親と同様に愛着行動が形成されていた。また、Lamb (1977) は、アタッチメントが2年後どのように変化しているのか調べたが、子どもは父親、母親いずれかへの偏りを示さなかった。さらに、Chibucos & Kail (1981) は、縦断的研究を行い、2か月の時点で形成される父子間のアタッチメントの質が7か月半目のアタッチメントの安定性に大きな影響力を持つこと、父親の言葉かけと子どもと顔を合わせた交流がアタッチメント形成と関連性があることを指摘している。

また、父親の子育てへの関与が子どもの自立性の発達に積極的な意味を持つ (Baumrind & Black, 1967) ことが示されており、子どもの社会的行動は、父親の関わり方や父親との遊びに影響される (Pedersen & Robson, 1969; Kotelchuck, 1976; Zelazo et al., 1977) との指摘もある。また、男児の友だち関係を取り上げた研究では、幼児期に父親が無関心であったり母親に服従的な場合には、友だち関係が貧弱であるが、父親が温かくて養護的である場合には、友だちから受容され、友だち関係が良好である (Lynn, 1974) という。さらに、Clarke-Stewart (1980) は1歳から2歳半になる子どもの縦断的な研究から、父親は子どもの社会性と情緒面に顕著な影響力を持つと指摘している。一方、性役割に関し、Williams, Radian & Allegro (1992) は、父親が子どもの幼い時期に多くの関わりを持った場合に、子どもは年齢と共に柔軟性に富んだ性役割行動を取るようになるとしている。このように、父親は子どもの社会性の発達に積極的な影響力を持つとする指摘が多い。そのような中で、Easterbrooks & Goldberg (1984) は、父親の子どもの社会性の発達に及ぼす要因について、特に父親の態度と行動の質的な面の重要性を強調している。

父親の子どもへの間接的な影響に関する研究は、夫婦関係の中での父親の影響をとりあげたものである。例えば、Clarke-Stewart (1978) は、父親の存在が母親の子どもへの接触の仕方に影響を与えており、母親が父親に与える影響以上に重要であるという示唆に富む報告をしている。また、母親が父親から援助を受け、受容されていると認知するほど、母子関係が良好であり、子どもの発達上好ましい環境になるとする研究 (Crockenberg, 1981) がある。同様に、調和のある夫婦関係が母子の愛着関係を促進し (Durrett, Otaki & Richards,

1984; 大日向, 1988)、さらには子育ての方針に関して夫婦間の一致度が高い場合に、子育てのための良い条件が形成され、子どもの社会適応が良好である (Deal, Halverson & Wampler, 1989) という指摘もなされている。これらの研究は、核家族が多く、父親が子どもと関わるが多くなっている現在、父親が子育てを通して幼児の社会性の発達に直接的、間接的に影響を与えようという観点から重要な示唆を与えている。

上述の父親健在家庭の場合に関して、木田 (1980, 1981) は、共働き家庭の調査研究により、幼児期における父親の育児参加が幼児の社会性の発達などに積極的な意味を持つことを示唆する結果を得ている。また、尾形 (1989, 1990) は、専業主婦家庭と共働き家庭を対象とした調査研究で、両家族形態ともに、幼児の社会性の発達に父親は母親と同様に影響するという結果を得ている。しかし、従来の研究では共働き家庭と専業主婦家庭の比較の中で父親の役割について検討されているものは少ない。

本研究は、以上を踏まえて父親健在家庭に関して次の3点を検討することを目的とする。第1に、共働き家庭と専業主婦家庭における父親の育児への参加を比較する。第2に、両家族形態の幼児の社会生活能力を比較し、第3に、父親の育児参加と幼児の社会生活能力との関連性を明らかにする。

方 法 調査対象

埼玉県と東京都を中心とした共働き家庭81世帯と専業主婦家庭100世帯の父と母。祖父母がいる場合にはその影響も考えられるため、父、母、子から成る核家族に限定した。また、就学前児(1~6歳)の家庭のみに絞った。調査対象の家庭状況はTABLE 1に示した。

調査内容

1. 父親・母親の育児参加の調査項目

木田 (1980) が作成した項目を用いた。具体的には、次の5領域を測定する22項目より成る。〈身の世話〉(8)、〈遊びを通じた親子の交流〉(4)、〈躾〉(6)、〈育児についての関心〉(2)、〈育児方針〉(2)。(カッコ内の数字は下位項目数を示す。) 22の質問に対して、父母各々に「よくする」「時々する」「あまりない」「全然ない」の4段階評定で回答を求めた。(〈育児方針〉の1項目のみ5段階評定である。)

なお、上述の育児参加に関するアンケートは父親・母親各々に依頼したが、本研究は共働き家庭と専業主

TABLE 1 調査対象とした共働き家庭と専業主婦家庭の家庭状況

		共働き家庭		専業主婦家庭	
対象児の出生順	第1子	38人	46.9%	50人	50%
	第2子	36	44.4	39	39
	第3子	7	8.6	11	11
対象児の性別	1-3歳男	19人	23.5%	26人	26%
	1-3歳女	18	22.2	25	25
	4-6歳男	20	24.7	22	22
	4-6歳女	24	29.6	27	27
親の年齢		(父)	(母)	(父)	(母)
	30歳以下	14人	17.3%	32人	39.5%
		(父)	(母)	(父)	(母)
	31歳以上	67	82.7	49	60.5
職業		(父)	(母)	(父)	(母)
	教員	20人	24.7%	36人	44.4%
	公務員	8人	8%	14	17.3
	会社員	7	8.6	6	6
	自営業	34	42.0	13	16.0
	その他	9	11.1	7	8.6

婦家庭の父親の育児と幼児の社会生活能力を分析し、父親の影響力を検討することを目的としている。したがって、特に、父親の育児参加を取り上げ、これを中心とした分析を進めた。

父親へのアンケート結果に基づいて、共働き家庭と専業主婦家庭各々に子どもの年齢群ごとに α 係数を算出した。その結果、共働き家庭の年少群、.91、年長群、.83、専業主婦家庭の年少群、.88、年長群、.88の α 係数が得られ、項目は信頼性を備えていると判断した。

2. 子どもの社会生活能力の調査項目

子どもの社会生活能力はS—M社会生活能力検査(日本文化科学社)でとらえた。S—M社会生活能力検査は次の6種の能力を測定するものである。(1)身辺自立(SH)…衣服の着脱、食事、排泄などの身辺自立に関する生活能力。(2)移動(L)…自分が行きたいところに移動する生活能力。(3)作業(O)…クレヨン、鉛筆などのような日常生活の中にある道具を使う生活能力。(4)意志交換(C)…言葉や文字などによるコミュニケーション能力。(5)集団参加(S)…社会生活への参加の程度を示す生活能力。(6)自己統制(SD)…自己を抑制し、自分の行動に責任を持ち目的に近づく能力。

調査の実施方法

家庭内のプライバシーに関わる質問内容であり、協力を得ることに困難が予想されたので、筆者および調査協力者である学生の知人を調査対象とした。その

TABLE 2 父親の育児参加の調査項目

(1)「身の世話」

- ① 子どもの着替えの衣服を揃えるか。
- ② 衣服の着脱の手伝いをするか。
- ③ 洗顔洗髪の手伝いをするか。
- ④ 排泄の世話をするか。
- ⑤ 食事をさせるか。
- ⑥ 保育園・幼稚園の送り迎えをするか。
- ⑦ 入浴の世話をするか。
- ⑧ 夜寝かしつけるか。

(2)「遊びを通じた親子の交流」

- ① 玩具を用いた遊びをするか。
- ② 運動的遊びをするか。
- ③ 本を読んであげるか。
- ④ 散歩や公園に連れて行くか。

(3)「躾」

- ① 食事の際に躾をするか。
- ② 排泄の躾をしているか。
- ③ おもちゃの後かたづけをさせるか。
- ④ テレビを見る時間の指導をしているか。
- ⑤ お手伝いするように励ましたり、注意をしているか。
- ⑥ 悪いことをしたとき叱るか。

(4)「育児についての関心」

- ① 子育てに関する本や新聞記事を読むか。
- ② 子育てについて身近な人たちと話をするか。

(5)「育児方針」

- ① 育児方針について夫婦で話し合うか。
- ② 育児方針に関する主導権は父母のどちらが持つか。

際できるだけ調査地域が広がるように配慮した。前もって電話で協力を約束してくれた家庭に行き、調査目的と、記入のしかたの説明をした。記入については、父親に関する項目は父親に、母親に関する項目は母親にそれぞれ依頼した。また、子どものS—M社会生活能力の検査への記入は母親に依頼した。

調査時期

1987年9月から11月および1988年8月から9月。両年度で結果に差異はみられないので、両年度の資料をまとめて分析する。

結 果

1. 共働き家庭と専業主婦家庭における父親の育児参加

育児参加度測定項目については、父親の育児参加度が高いほど数値が高くなるように、1～4と数値化した。なお、1歳～3歳11か月児を年少群、4歳～6歳11か月児を年長群とした。また、各年齢群の平均年齢

を共働き家庭と専業主婦家庭で男女別に比較したが有意差はなく、年齢に大きな違いはみられなかった(共働き家庭、専業主婦家庭各々の平均月齢は次のとおりである。年少男児：28か月、27.5；年少女児：29.28、29.32；年長男児：60.65、63.14；年長女児：63.5、61.07)。共働き家庭と専業主婦家庭各々の父親の育児参加度の領域別平均値を子どもの年齢別に示したものがFIGURE 1、FIGURE 2である。

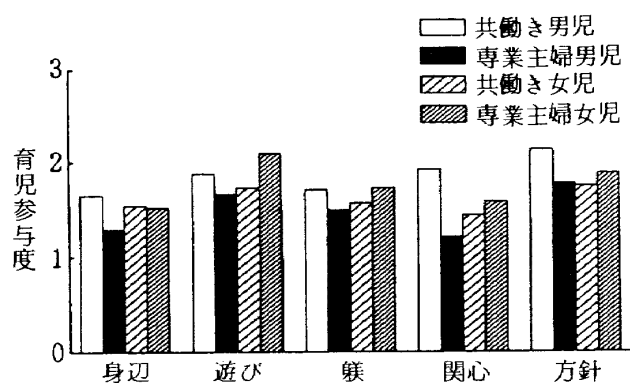


FIGURE 1 年少児に対する父親の育児参加

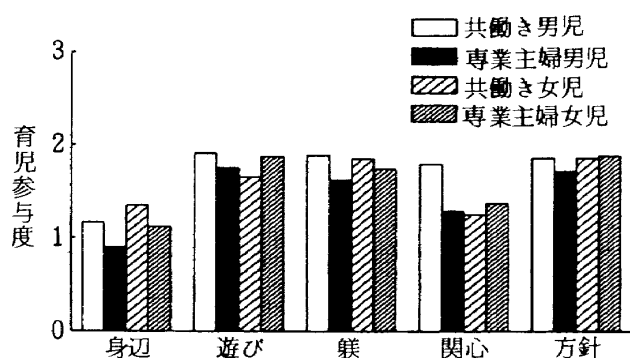


FIGURE 1 年長児に対する父親の育児参加

年少児の場合、男児において、共働き家庭の父親の方が専業主婦家庭の父親よりも育児参加度が一貫して高い傾向がみられる。各領域におけるこの差異を検定してみると、男児では、＜育児についての関心＞($t=3.31$, $df=43$, $p<.01$) および＜育児方針＞($t=2.30$, $df=43$, $p<.05$) の2領域で共働き家庭の父親の方が育児参加度が有意に高い。＜身辺の世話＞は5%水準では有意には達しなかった($t=1.91$, $df=43$, $p<.10$)。下位項目別にみると、＜身辺の世話＞では、「排泄の世話」($t=2.46$, $df=43$, $p<.05$)、「保育園・幼稚園の送り迎え」(Welch法: $t=4.15$, $df=22$, $p<.001$) において共働き家庭の父親の育児参加度が有意に高かった。＜育児についての関心＞では、「子育てに関する本や新聞記事を読む」において共働き

家庭の父親の育児参加度が高かった ($t=4.07$, $df=43$, $p<.001$)。また、＜育児方針＞においても、「育児方針の父母間での話し合い」で、共働き家庭の父親の参加度が有意に高かった ($t=2.94$, $df=43$, $p<.01$)。

女児については、いずれの領域においても父親の育児参加度に有意な差はみられなかった。下位項目についてみると、＜身辺の世話＞の「保育園・幼稚園の送り迎え」で共働き家庭の父親の方が有意に高かった (Welch法: $t=3.55$, $df=20$, $p<.05$)。＜遊びを通じた親子の交流＞の「散歩や公園に連れて行く」では逆に専業主婦家庭の父親の参加度の方が高かった ($t=2.03$, $df=41$, $p<.05$)。

次に年長児について、男児では、全ての領域において共働き家庭の父親の方の育児参加度が高い傾向があるが、差が有意であったのは＜育児についての関心＞($t=2.31$, $df=39$, $p<.05$) のみである。下位項目をみると、＜身辺の世話＞の「保育園・幼稚園の送り迎え」において共働き家庭の父親の育児参加度が有意に高い ($t=3.87$, $df=39$, $p<.05$)。同様に＜遊びを通じた親子の交流＞の「本を読む」($t=2.38$, $df=39$, $p<.05$)、＜育児についての関心＞の「子育てについて身近な人達と話をする」($t=2.16$, $df=39$, $p<.05$) でいずれも共働き家庭の父親の方が参加度が有意に高かった。

女児ではいずれの領域においても参加度に有意な差はみられなかった。下位項目についてみると、＜身辺の世話＞の「子どもの着替えの衣服を揃える」において共働き家庭の父親の方が有意に高かった ($t=2.62$, $df=41$, $p<.05$)。

2. 共働き家庭と専業主婦家庭の子どもの社会生活能力

両家族形態における子どもの社会生活能力を比較検討するために、各領域ごとの社会生活年齢(SA)を算出した。また、各領域の社会生活年齢を、子どもの生活年齢で割ることにより社会生活指数(SQ)を算出した。共働き家庭と専業主婦家庭の子どもの年齢別に、6領域ごとの平均社会生活年齢(月齢)とSQの平均値を示したのがTABLE 3である。

まず男児についてみると、年少児では共働き家庭と専業主婦家庭各々のSQに有意差はみられなかった。また、社会生活能力の各領域において共働き家庭の子どもの方が平均社会生活年齢が高い傾向があるが、有意差はみられなかった。年長児では、共働き家庭の子どもの方がSQが高い傾向がみられた ($t=1.87$, $df=39$, $p<.10$)。社会生活能力の各領域については一貫した強い傾向はみられず、有意差も得られなかった。

TABLE 3 共働き家庭と専業主婦家庭の子どもの平均社会生活年齢

	領域	共働き家庭	専業主婦家庭	有意差
年少男児	身辺自立	29.05 (13.51)	28.46 (14.50)	ns
	移動	34.21 (14.05)	34.08 (12.60)	ns
	作業	31.68 (12.66)	31.27 (14.38)	ns
	意志交換	33.05 (12.48)	30.77 (12.40)	ns
	集団参加	34.37 (13.24)	32.65 (11.13)	ns
	自己統制	33.42 (14.14)	30.00 (16.58)	ns
	SQ	112.63 (17.00)	109.85 (18.55)	ns
年少女児	身辺自立	35.28 (15.40)	33.48 (17.18)	ns
	移動	35.33 (11.54)	34.36 (12.04)	ns
	作業	33.61 (12.05)	36.52 (14.22)	ns
	意志交換	35.50 (12.00)	36.12 (15.80)	ns
	集団参加	36.78 (12.73)	36.48 (15.38)	ns
	自己統制	36.39 (13.71)	37.88 (17.35)	ns
	SQ	119.78 (13.71)	118.20 (11.09)	ns
年長男児	身辺自立	72.55 (15.17)	68.52 (11.38)	ns
	移動	64.25 (19.69)	62.81 (8.64)	ns
	作業	73.10 (19.80)	67.10 (9.93)	ns
	意志交換	65.55 (12.02)	67.05 (9.90)	ns
	集団参加	70.40 (14.00)	70.90 (15.08)	ns
	自己統制	67.90 (14.36)	66.86 (13.20)	ns
	SQ	111.45 (12.80)	104.38 (10.76)	+
年長女児	身辺自立	78.04 (20.87)	75.86 (18.73)	ns
	移動	65.50 (14.50)	60.64 (9.91)	ns
	作業	71.29 (15.66)	68.82 (11.17)	ns
	意志交換	72.33 (14.67)	71.82 (12.93)	ns
	集団参加	74.79 (16.40)	69.75 (10.09)	ns
	自己統制	76.13 (21.88)	71.57 (15.79)	ns
	SQ	113.33 (15.14)	111.93 (12.83)	ns

SQ 以外の左の数字は平均社会生活年齢(月齢)を、()内は標準偏差値を示す。

+…p<.10

次に女児についてみると、年少児ではSQにおいて、社会生活能力の各領域においても有意な差はみられなかった。年長児においては、社会生活能力の各領域で共働き家庭の子どもの平均社会生活年齢が一貫して高い傾向がみられるが、差は有意には達しなかった。また、SQにおいても有意差はみられなかった。

3. 父親の育児参与と子どもの社会生活能力との関係

それでは、父親の育児参与度と子どもの社会生活能力とにいかなる関係がみられるであろうか。この点を検討するために、育児に関する6領域を説明変数とし、社会生活能力を目的変数とする重回帰分析を、共働き家庭、専業主婦家庭別に、また、子どもの性と子ども

の年齢群別に実施した。結果はTABLE 4に示す通りである。

まず、重相関係数をみると、年少男児と年長女児においてのみ有意な重相関係数が得られた。年少男児では共働き家庭と専業主婦家庭の「移動」、共働き家庭の「意志交換」、年長女児では専業主婦家庭の「身辺自立」、共働き家庭の「移動」と「集団参加」である。

次に父親の育児参与と社会生活能力との関係を見ると、＜身辺の世話＞で、ほぼいずれの条件においても偏回帰係数がマイナスとなっていることが注目される。このうち、専業主婦家庭で有意な標準偏回帰係数が得られた。＜遊び＞では共働き家庭の年長女児において有意な標準偏回帰係数がみられるのみである。また、＜躾＞において、最も多くの有意な標準偏回帰係数が得られ、両家族形態ともに年少児においてその関連が強く示されている。

共働き家庭の年少児についてみると、男児では「移動」「意志交換」「集団参加」と、女児では「身辺自立」との間に、また、専業主婦家庭の年少男児では「身辺自立」を除いた全ての領域において、女児では「身辺自立」「意志交換」「自己統制」において有意な標準偏回帰係数が得られた。さらに、年長児では専業主婦家庭の年長女児において「作業」「集団参加」で有意な標準回帰係数が得られただけである。この結果より、＜躾＞は年少児で直接的な影響をもたらすが、年長児ではその影響力が弱まることが示唆されていると言える。

また、＜育児方針＞については年長女児において有意な標準偏回帰係数が得られた。具体的には、共働き家庭で「身辺自立」「移動」「意志交換」「集団参加」「自己統制」において、また専業主婦家庭で「身辺自立」「作業」において確認された。

考 察

核家族化が進行する中、父親の育児への関わりがどのような状況にあるのかを、共働き家庭と専業主婦家庭の比較を通して分析検討した。その結果、父親の育児参与に関しては、共働き家庭の父親は専業主婦家庭の父親よりも年少・年長男児への関わりが高いことが示された。

年少・年長男児ともに共働き家庭の父親の方が＜育児についての関心＞が有意に高いが、このことは、共働き家庭の子育てにおける環境が大きな原因とも考えられる。なぜなら、夫婦が揃って仕事をする場合、時間的な制限と肉体的、精神的労力をともなった育児に

TABLE 4 父親の育児参与と幼児の社会生活能力に関する重回帰分析

説明変数 (育児)	身辺自立 (SH) 標準偏回帰係数		移動 (L) 標準偏回帰係数		作業 (O) 標準偏回帰係数		意志交換 (C) 標準偏回帰係数		集団参加 (S) 標準偏回帰係数		自己統制 (SD) 標準偏回帰係数	
	〈共〉	〈専〉	〈共〉	〈専〉	〈共〉	〈専〉	〈共〉	〈専〉	〈共〉	〈専〉	〈共〉	〈専〉
身辺の世話 (年少) 男		-.423		-.265	-.101	-.369	-.127	-.538*		-.526		-.352
女	-.296	-.266	-.500	-.359	-.436	-.290	-.140	-.352	-.428	-.229	-.272	-.233
(年長) 男		-.118	.175	.239					-.132	-.336	-.240	-.245
女		-.713**	-.196		-.238	-.639**	-.343	-.260	-.350	-.306	-.267	-.465
遊び (年少) 男		.113		.269	.103	.198	.221	.232		.143	.116	.125
女	-.105		.164	.245	-.218		-.227		-.158		-.245	-.107
(年長) 男	-.213	-.106	-.139	-.434		-.216		-.126		-.135		
女	.324	-.194	-.132	-.200		.176	.235		.251	.108	.456*	.453
読 (年少) 男	.547*	.458	.661**	.710**	.435	.611*	.576*	.574*	.520*	.583*	.509	.550*
女	.409	.513*	.221	.374	.461	.504	.370	.603*	.481	.424	.273	.626*
(年長) 男	.349	-.316		.158	.144	-.188			.265		.333	
女	-.174	.136	.215	.242	.296	.651**	.291	.405	.277	.614**	-.141	.295
育児関心 (年少) 男	-.255	-.404	-.299	-.590**	-.284	-.495	-.204	-.346		-.404		-.344
女	.150		.273	-.245	.486		.115		.150		-.156	-.201
(年長) 男	-.150	.169	-.325	.313	-.328	-.151	-.110		-.105	.253		
女	.270		.247		-.544	-.330		-.232	.395	-.204	.412	-.375
育児方針 (年少) 男	-.208	.371	-.217	.354	-.146	.246	-.430	.186	-.339	.309	-.407	.241
女	.184		.299	.261			.105		.274	.160	.465	
(年長) 男	.258	.163		-.403	.227	.358	-.281	.314			-.130	.304
女	.564**	.489**	.590*	.158	-.220	.369*	.548*	.246	.538*	.102	.562*	.342
重相関係数 (年少) 男	.700	.581	.791*	.746**	.583	.623	.760*	.619	.653	.645	.682	.544
女	.533	.518	.591	.624	.697	.504	.469	.583	.624	.479	.587	.617
(年長) 男	.513	.314	.478	.498	.451	.409	.338	.281	.331	.396	.391	.366
女	.606	.646*	.748**	.371	.471	.720	.650	.426	.661*	.534	.641	.523

〈共〉は共働き家庭、〈専〉は専業主婦家庭を示す。

* $p < .05$ ** $p < .01$

なるために、父親の育児参与も必然的に多くなると考えられるからである。したがって、子育ての上で生ずる種々の問題とそれに基づく悩みも派生すると考えられる。〈育児方針〉についても共働き家庭の年少・年長男児への関わりが高くなっているが、これも同様に考えることができよう。つまり、共働き家庭では夫婦が子育てに関わらざるを得ない状況にあるが、それだけ夫婦各々が子育てに関して抱える問題が生じやすくなるであろう。しかも、核家族という状況の中ではその問題を相談する相手は、妻や夫を中心とする身近な人になるとも十分考えられうる。

専業主婦家庭の父親は年少女児に対して共働き家庭の父親よりも各領域において高い数値を示している。中でも〈遊び〉の下位項目の「散歩や公園につれて行

く」で有意に高い値を示し、共働き家庭の場合と異なり、育児にかかる時間的ゆとりなど共働き家庭と比較して、育児そのものの質的な差異が存在するように考えられる。

しかし、各々の家族形態における子どもの社会生活能力には有意な差がみられなかった。このことは、母親の持つ影響力の大きさを示すものかもしれない。しかしながら、重回帰分析の結果、父親の育児参与と子どもの社会生活能力に関連性がみられ、父親の影響は程度の差はあれ、否定することはできないように思われる。

重回帰分析において直接的な影響と考えられる育児領域〈身辺の世話〉において、両家族形態とも負の関連性がみられた。このことは、子どもの身の周りの世

話が必ずしも社会生活能力の発達に積極的な影響力をもたらさないということを示唆するものであろうか。つまり、手を掛け過ぎた世話は子どもの自主的な行動を伸ばす方向に作用しないのであろうか。それとも、逆に、社会生活能力が低いために多くの〈身近の世話〉を与えているに過ぎないのだろうか。本研究結果のみからは結論できない。〈躰〉に関しては、共働き家庭、専業主婦家庭ともに年少児の社会生活能力の各項目と関連が強く、しかも女兒よりも男児においてその傾向が顕著であった。これは、年少男児が特に成長発達の過程にあり、生活に関わる種々のことを父親を通して吸収しており、また、〈躰〉という関わりの中で父親は直接的に子どもに生活に関する多くのことを伝えているからであると考えられる。

父親の間接的な影響力と考えられる〈育児方針〉は、年長女兒においてのみ社会生活能力の各項目との間に関連がみられ、加齢にともなってその影響力が増加している。特に、共働き家庭では「身辺自立」「移動」「意志交換」「集団参加」「自己統制」、専業主婦家庭では「身辺自立」および「作業」との間に関連がみられた。〈育児方針〉のもたらす影響について検討するため、〈育児方針〉の項目、「育児方針についての父母の話し合い」(項目1)について父親と母親の参与度の相関係数を算出した。その結果、共働き家庭の年少女児で $r=.80$ ($p<.001$)、年長女兒で $r=.82$ ($p<.001$)であり、また、専業主婦家庭では年少女児で $r=.91$ ($p<.001$)、年長女兒で $r=.93$ ($p<.001$)であった。このことから、共働き家庭・専業主婦家庭各々において、年長女兒の育児について夫婦間で相談などを通しての一致した関わりを持つことが示されており、このことが間接的な影響力として作用しているとも推測されよう。

上述の結果は夫婦間の調和の取れている家庭環境では、就学前女兒の自由で解放された行動の表出を促す (Vaughn, Block & Block, 1988) という指摘や、父親が母親と協力することによって家庭内の調和を形成し、そのことが母親の子育てに良い影響力をもたらす、子どもの発達上好ましい環境が形成される (Clarke-Stewart, 1978; Crockenberg, 1981)、また、子育ての方向づけに関して、両親の一致度が高いほど子育てのための良い条件が形成され、子どもの社会適応も良好である (Deal, Halverson & Wampler, 1989) といった指摘の一部を支持するものであろう。

さて、共働き家庭と専業主婦家庭各々における父親の育児参与度を比較すると、共働き家庭の父親は専業主婦家庭の父親よりも年少・年長男児に、専業主婦家

庭の父親は共働き家庭の父親よりも年少女児に関わりを多く持つという特徴が示された。このことに関して、父親は娘よりも息子に対してより頻繁でより多様な相互交渉を展開するという幾つかの指摘 (例えば, Huston, 1983) がある。しかし、今回はこの指摘と異なる結果が得られた。これに関しては共働き家庭と専業主婦家庭各々における育児観の相違、子どもの性別に対する期待感、それに基づく育児方針の相違、また子どもの年齢など種々の要因が考えられるが、これらの要因も加味して更に検討して行く必要がある。

また、両家族形態における父親の育児参与と子どもの社会生活能力との関連については、両家族形態の中で派生する幾つかの要因が存在していると思われる。このことについては父親を中心に、内省面についての調査を実施すると同時に、事例的な研究も含めて、さらに多角的に分析を進めたいと考える。特に、今後は実際の観察によって、父母の育児行動と子どもの社会生活能力について、ここで得た結果を検証するという課題も残されている。

引用文献

- Anderson, R. E. 1968 Where's Dad? Paternal deprivation and delinquency. *Archives of General Psychiatry*, 18, 641—649.
- Baumrind, D., & Black, E. 1967 Socialization practices associated with dimensions of competence in preschool boys and girls. *Child Development*, 38, 291—327.
- Chibucos, T.R., & Kail, P.R. 1981 Longitudinal examination of father-infant interaction and infant-father attachment. *Merrill-Palmer Quarterly*, 27, 2, 81—96.
- Clarke-Stewart, K.A. 1978 And daddy makes three: The father's impact on mother and young child. *Child Development*, 49, 466—478.
- Clarke-Stewart, K.A. 1980 The father's contribution to children's cognitive and social development in early childhood. (In) Pedersen, F.A. (ed.) *The Father Infant Relationship*, Prager.
- Crockenberg, S. B. 1981 Infant irritability, mother responsiveness, and social support influences on the security of infant-mother attachment. *Child Development*, 52, 857—865.
- Deal, James E., Halverson, Charles F. Jr., & Wampler, Karen Smith 1989 Parental agreement on

- child-rearing orientations : Relations to parental, marital, family, and child characteristics. *Child Development*, **60**, 1025—1034.
- Durrett, Otaki, & Richards. 1984 Attachment and the mother's perception of support from the father. *International Journal of Behavioral Development*, **7**, 167—176.
- Easterbrooks, M. Ann, & Goldberg, Wendy, A. 1984 Toddler development in the family : Impact of father involvement and parenting characteristics. *Child Development*, **55**, 740—752.
- Hetherington, E. M. 1972 Effects of father absence on personality development in adolescent daughters. *Developmental Psychology*, **7**, 313—326.
- Huston, A. 1983 Sex typing. In E.M. Hetherington (Ed.), P.H. Mussen (Series Ed.), *Handbook of child psychology : Vol. 4. Socialization, personality, and social development* (Pp. 387—467). New York : Wiley.
- 木田淳子 1980 共働き家庭における父親の育児行動
滋賀大学 教育学部紀要 人文・社会・教育科学
30, 116—135.
- 木田淳子 1981 共働き家庭における父親の育児行動
滋賀大学 教育学部紀要 人文・社会・教育科学
31, 79—97.
- Kotelchuck, M. 1976 The infant's relationship to the father : Experimental evidence. In M.E. Lamb (Ed), *The role of the father in child development*. New York : Wiley.
- Lamb, M.E. 1975 (B) *The relationships between infants and their mothers and fathers*. Unpublished doctoral dissertations, Yale University.
- Lamb, M.E. 1977 Father-infant and mother-infant interaction in the first year of life. *Child Development*, **48**, 167—181.
- Lynn, D.B. 1974 *The father : His role in child development*. Monterey, CA : Brooks-Cole.
- 尾形和男 1989 子どもの発達における父親の役割についての研究 (II) —父親の子どもに対する育児と子どもの社会性との関連—国際学院埼玉短期大学研究紀要 **10**, 8—33.
- 尾形和男 1990 子どもの発達における父親の役割についての研究 (III) —父親の子どもに対する育児と子どもの社会性との関連—国際学院埼玉短期大学研究紀要 **11**, 29—43.
- 荻原康生 1987 漂流する父親 母子研究 **8**, 67—76.
- 大日向雅美 1988 「母性の研究—その形成と変容の過程：伝統的母性観への反証」 川島書店
- Oltman, J.E., & Friedman, S. 1967 Parental deprivation in psychiatric conditions : III. In personality disorders and other conditions. *Diseases of the Nervous System*, **28**, 298—303.
- Pedersen, F.A., & Robson, K.S. 1969 Father participation in infancy. *American Journal of Orthopsychiatry*, **39**, 466—472.
- Vaughn, Brian E., Block, Jeanne, H., & Block, Jack 1988 Parental agreement on child rearing during early childhood and the psychological characteristics of Adolescents. *Child Development*, **59**, 1020—1033.
- Williams, E., Radin, N., & Allegro, T. 1992 Sex role attitudes of adolescents reared primarily by their fathers : An 11 year follow-Up. *Merrill-Palmer Quarterly*, **38**, 4, 457—476.
- Zelazo, P.R., Kotelchuck, M., Barber, L., & David, J. 1977 Fathers and sons : An experimental facilitation of attachment behaviors. Paper presented at the meetings of the Society for Research in Child Development, New Orleans.
(1993.8.13 受稿, '95.7.21 受理)